古典・古記録・古文書などの判読困難な難字・異体字を現行の漢字に照応させて、すばやく検索できる解読字典の誕生！

「監修のことば」より抜粋　日本に漢字が輸入され、日本語として書かれたのは、五世紀に遡るといわれている。それは中国系の渡来人がヤマト王権の文書を取り扱い、作成や解読にあたっていたことにはじまると考えられている。おそらく彼らは日本の固有名詞を表記することに苦慮し、漢字の意味を捨象し、その音だけを用いて日本語を表記する方法を習得していったようである。このような漢字表記で日本語を示す努力が蓄積されて、しだいに日本人にも広く普及し、多くの日本語が漢字を用いて記載されていった。その後の日本人は驚くべきほど多くの漢字を導入し、その中には難字と総称されるさまざまな異体字も含まれている。古典や古記録・古文書などの史料に現れるそれらの異体字の多くは漢和辞典や国語辞典に収録されていない文字であり、それらの異体字の存在は、史料そのものの理解の障害ともなっている。本字典に収録されている異体字は1万2600余字にのぼり、文字編において現行の漢字に対応した異体字が総覧でき、解読編において、異体字の検索が可能となっており、研究者にとっても、古典を読まれる方々にとっても、便利な字典となっている。

【本書の構成と特色】

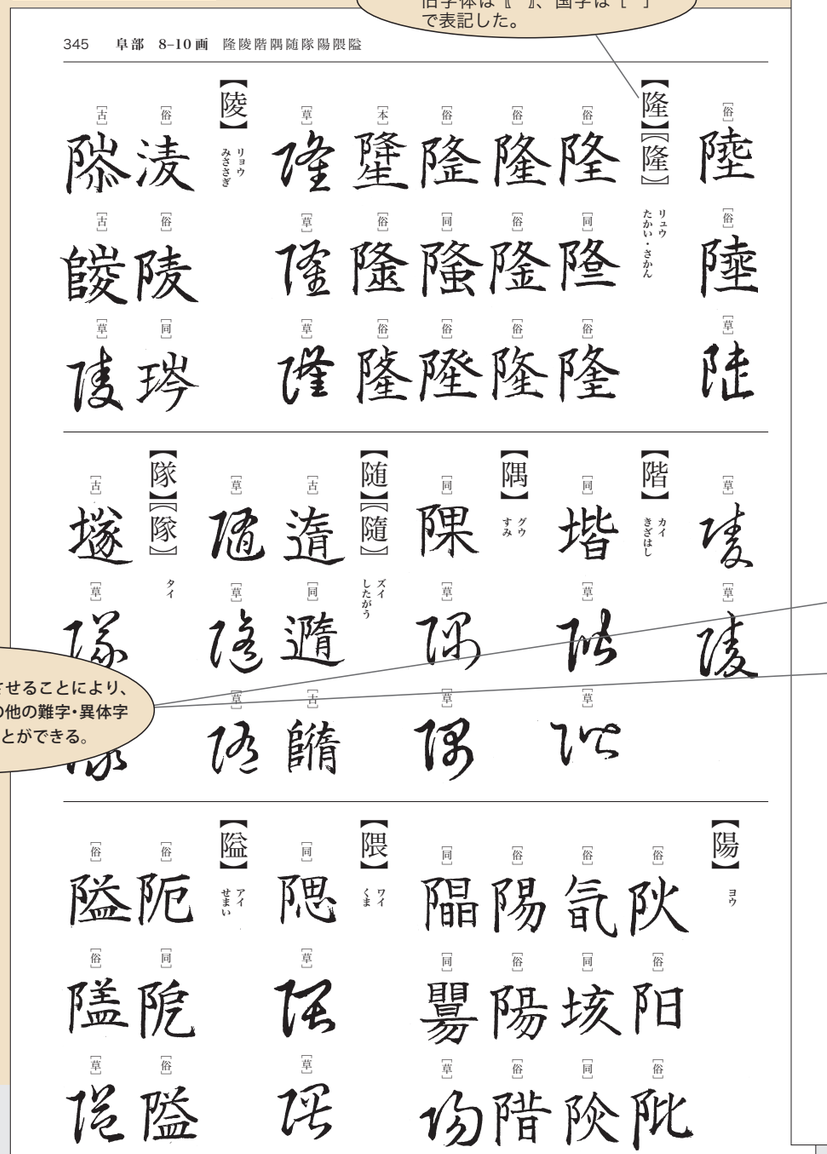
〈文字編〉 1、親字4600余語に照応した難字・異体字1万2600余字（古典・古記録・古文書・古辞書より採字）を収録。活字がないため、難字・異体字は全て筆文字で収録。2、難字・異体字は、画数順に配列、末尾にくずし字を収録。

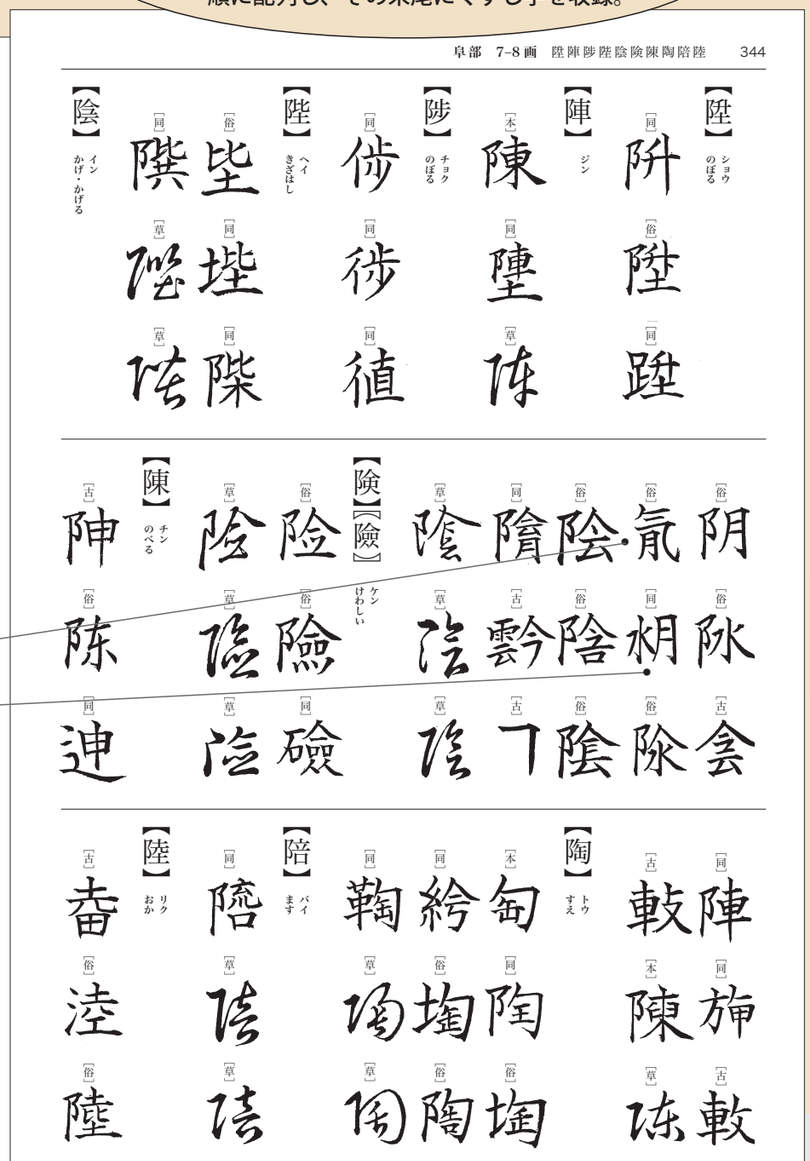
〈解読編〉 1、すべての難字・異体字を総画数順・部首順に配列。めざす難字・異体字のすばやい判読を可能にさせた。2、文字編との照応により、親字を同じとするさまざまな難字・異体字の総覧を可能とさせた。

解読編〈8画〉

解読編：異体字を総画数・部首順に配列することにより、めざす難字・異体字が現行のどの漢字の異体字であるかがすばやく判読できる画期的な検索機能。

文字編〈阜部〉





異体字の種類の略称

【本】本字　字源的に忠実で、『説文解字』収録の篆文に従った文字。たとえば「備」に対する「俻」などである。

【古】古字　『説文解字』に「古文」と記されている文字と、『康熙字典』などに「古字」と記されている文字。たとえば「南」に対する「𠦂」などである。また則天武后による造字（「国・國」に対する「圀」など）は**【古・則】**と略記した。

【同】同字　『康熙字典』『集韻』『正字通』などで「～に同じ」と記され、正字と同等に用いられてきた文字。たとえば「婚」に対する「婚」など。**【別体】【別字】**ともいう。

【俗】俗字　正字が公式の場で用いられてきたのに対して、通俗的に広く用いられてきた文字。その多くは、字画の一部を省略・簡略化したもの（たとえば「幾」に対する「弋」など）や、同音の簡略な文字に置き換えたりしたもの（たとえば「糧」に対する「粮」など）で、いわゆる**【略字】**といわれるものである。

【合】合字　親字二字を一字とした異体字である。たとえば「木工」に対する「杢」などである。

【草】草字　草字（草書）と呼ばれる「くずし字」は、楷書体の親字を特定することが困難なほど簡略・抽象化された文字が多く、異体字と同様、研究者や書家以外の現代人にとってはまさに「難字」といえるものとなっている。本書では、掲出した異体字の親字に対応した草字（中国の古典より採字）を、異体字の末尾に収録した。